

幕末「志士」の由緒と近代

―ある丹波郷士の「草莽」化と顕彰―

笹部昌利

【要旨】 本稿では、丹波郷士湯浅五郎兵衛を対象とし、幕末維新期の政治世界に身を置き、活動をおこなう人びとの政治志向とその背景に存在する家意識および由緒について考え、「志士」と称された人びとの実際の政治活動によって何が得られ、これが次代においてどのように活かされたかを考察した。近世に調べられた自家の「由緒」によって自己認識がなされ、政治世界への志を抱いて、「草莽」として活動したのち、近代に「志士」として発掘、顕彰されるという連関構造について確認しえた。

テーマ 丹波郷士・由緒・草莽・志士・湯浅五郎兵衛

はじめに

われわれには、幕末維新の激動を生きた人物と聞き及ぶと、すぐさま「志士」か「勤王」か「攘夷」か、というような、当該期の既成概念への反発分子をイメージし、彼らについて旧体制を打ち崩した「正義の士」と

と考える傾向が一般認識としてある。そのような認識は、歴史を重んじ、過去の事実を現在の拠り所としてきたわが国においては、至極もつともであり、かつ標準的な感覚であろうが、「志士」と呼ばれた人びとに対するイメージとその実像は大きく異なる。さらにいえば、広くメディアを見渡すと、実像を捨象しても肯定的なイメージができあがればよいという意識が強く働いていることもわかる。事実、歴史上の人物には、その見方、捉え方によって多様性が存在する。その人物における日常と非日常、家内での役割（父、母、長男、庶子など）と社会的な役割（武士、商人、職人、農民など）によって、人物像が想定されて、歴史理解がなされていく。日本近代という時代においては、先人をいかに顕彰し、その功績をいかに後世にとどめていくかにその力点が置かれてきた。それはキラ星の如くに編まれた人物に関する伝記の存在によってもうかがえる。しかしながら、人物の考察は、顕彰するのみならず、対象となる人物の歩みの正も負もともに受けとめて分析することにより、はじめてその深化がなされる。

「志士」とは如何なる人びとをさすのか。一般的な辞書の解釈でいえば、「身を犠牲にして国や社会のために尽くそうという、高い志をもっている人」^①、「国家、社会が危機的な状況に瀕したとき、高い志を持ち、自らの身を犠牲にして力をつくそうとする人」とある。近世中期、領主の政治を悪政と評価し、立ち上がる人びとのおこないは、「横議横行」すなわちヨコシマな議論や行動と評され、取り締りの対象とされた。その意味でいえば、幕末という時代は、政治のためになされる「横議横行」をある程度は許さざるをえない社会状況にあったことになる。『論語』にいう、「志士仁人」のあるべき人道論は、当時の社会情勢を批判するものたちが、「有志之士」として動いていく際の証し、あるいは行動を理由付けるためのタマエとなった^②。

「有志之士」は当然、あらゆる階層、立場から出て、その行動形態はさまざまである。西郷隆盛、大久保利通、

木戸孝允、高杉晋作ら、大名家中（藩）という自らが置かれた枠組みのなかで運動する人びと。梅田雲浜、坂本龍馬、中岡慎太郎らのように、既存の枠組みを抜けて、江戸、京都の中央政界に活動の場を求める人びと。枠組みを出るも、地方で活動する人びと。彼らはすなわち大多数の「郷土」や「村役人」層に当たり、これまでは時代を象徴する人びととして考察されてはこなかった。一九八〇年代以降、地域史研究で掘り起こされ、九〇年代には「身分的中间層」として研究対象とされてきた。さらに、上記の活動を経済的に支援する人びと。例としては、薩摩藩および長州藩を経済的に支援した下関商人白石正一郎、坂本龍馬ら海援隊を支援した長崎商人小曽根乾堂などが挙げられよう。

本稿では、以下の大きく二つの問いの解明に重きをおいて、考察を進めていく。一つめに、幕末維新期の政治世界に身を置き、活動をおこなう人びとの政治志向とその背景に存在する家意識および由緒について考えること。二つめに、「志士」と称された人びとの実際の政治活動によって何が得られ、これが次代においてどのように活かされたか、である。

一つ目の問い、近世の由緒論にかかる研究は、近世社会における由緒が如何に認識されたのか、語られたのかを問う久留島浩の研究、⁽³⁾ 由緒書の機能や政治および社会情勢との関係性について考察した井上攻の研究、⁽⁴⁾ 近世社会において由緒書が創り出されることの意味を問うた山本英二の研究、⁽⁵⁾ 地域における歴史意識が如何にして生成されるのかを史料学的に問う坂田聡の研究の他、⁽⁶⁾ 多くの研究蓄積がある。しかしながら、幕末維新政治史においては、人びとの政治意識生成の背景として論じることがさほどなされてはいない。⁽⁷⁾ 二つ目の問い、すなわち「志士」研究については、幕末の「志士」と近代の中央および地方官僚の連関性を問うた佐々木克の研究、⁽⁸⁾ 幕末維新期の政治活動家をそのまま「志士」と認識し、その類型および明治初期のありようを考察し

た高木俊輔の一連の研究⁽⁹⁾があり、近年では、徳川慶喜、岩倉具視らの周辺に存在する草莽層を取り上げ考察した藤田英昭の研究がある。⁽¹⁰⁾ 筆者は、基本的に「志士」について、日本近代において生成された歴史観のなかで、その時代においてあるべき政治関与者に付されたイメージと考える。ゆえに、本稿では、藩権力のもとに存在する武士は「藩士」、それ以外の政治運動家を「草莽」と表することにする。

1 ある丹波郷士の由緒と「草莽」化

(1) 丹波郷士湯浅五郎兵衛⁽¹¹⁾と由緒

近世日本において、武士、農民、商人、芸能民、あらゆる階層の人間が、家の過去を調べて家の歴史と解し、これを「由緒」として語るにより自己を認識した。調べた歴史や由緒の名称は、「家譜」、「奉公書」、「由緒書」、「先祖書」、「過去書」など多様であるが、一様に武士や民衆、それぞれが有する由緒によって、その集団や個別の家が有したとされる権利が主張され、「自ら」の存在をよりよい方向に向けようとするための手がかりとして利用された。

なぜ由緒が語られるのか。また由緒によって語られた言説が歴史的にどのような意味を持つのか。由緒を語る人間が置かれた状況によって、その性格は異なるであろうが、本稿で主に取り上げる地域社会の指導者・有力者層においては、おおよそ次の解釈が成り立つと考える。

すなわち、領主支配のありようが変わったり、予期せぬ災害が発生したりして生じた環境の変化を、彼らは危機と考え、これを解決するべく由緒を語り、領主とのあるべき関係の構築を主張した。その意味でいえば由緒の語りは、それを語る人間が置かれた社会状況に生じた変化に対するおこないである。一八世紀後半

から一九世紀にかけて生じた社会的変動に対し、武士も民衆も、自己がいかなる存在であるのか、いかにあるべきかを捉えなおし、その現象が由緒を語る行為としてあらわれたのである。

園部藩小出家領丹波国上木住村（現、南丹市日吉町）の郷士であった湯浅五郎兵衛家の由緒は、一八世紀末から当時の当主によって調査がなされた。旧世木村誌編纂委員会によって作成された『園部藩別格上席待遇の郷士湯浅五郎兵衛家由緒書』には、その由緒がつづられた「乍恐由緒荒増書之覚」が翻刻されている。この史料の原本および写しは残念ながら伝存しない。「乍恐由緒荒増書之覚」が作成されたのは、翻刻の末尾の記載から「天保十一年（一八四〇）七月」であることがわかる。この時期は全国的に凶作が打ち続き、東北地方で多くの飢餓者が出たほか、畿内地域においても米の収穫高が平年の四割から四割五分となり、米価が平年の約六倍にまで高騰した。加えて、天保八年（一八三七）に大坂で起こった大塩平八郎の乱に見られるような民衆運動が後をたたない社会状況であった。

このような状況において、当該期の湯浅家当主、五郎兵衛宗精（五郎兵衛宗成の先代）は、湯浅家代々の由緒を書き上げて、領主である園部藩小出家に提出した。したためられた湯浅家の由緒は一二世紀初頭にまで遡る。紀州有田郡湯浅荘を本拠とする武士団湯浅党、その当主、湯浅有重の事歴より自家の歴史が書きおこされる。

①元永元年（一一一八）閏九月七日、白河法皇の熊野山行幸の際に行宮を造営し、これを賞せられて、天皇家の菊花紋章の使用を免許されたこと。

②平清盛より「猶子」たる恩顧を受け、保元の乱の際、後白河天皇に仕えたのち、四代にわって北面の武士を勤め、その功を賞され、丹波国水上郡竹田荘の領有を許されたこと。

③ 梅尾山高山寺開基として名高い明恵の実母を輩出したこと。

④ 建武新政の折、大塔宮護良親王の令旨を奉じて挙兵し、南北朝講和の折、神器を奉じ供奉上洛したこと。万里小路副房の推挙により、家祖有重以来の由緒を称えられ、丹波国世木荘を下賜され、明徳四年（一三九三）に同地に移り住んだこと。

⑤ 山城国西岡および丹波国船井・桑田両郡を拝領した細川藤孝への加勢と、藤孝の子として生を受けた時哉（幼名虎千代）が、天正三年（一五七五）一〇月、養子として湯浅家に入り、血縁関係が生まれたこと。¹⁴

⑥ 中近世移行期に細川家と密接な関係を保ち、園部藩小出家に対しては、「除地」（年貢諸役を免除された土地）を許された郷士上席の家として勤仕してきたこと。

以上の由緒を理由として、全国的に凶作が打ち続き、度重なる民衆運動によって世の中が混乱をきたしていた天保期において、作成者の五郎兵衛宗精は、いまだ幼年の又左右（のちの五郎兵衛宗成）¹⁵へと跡目相続するに当たり、園部藩領に住居する他の郷士とは「格別訛違」を主張して、「同列」に扱われることを黙止しがたいとし、湯浅家にとってよりよい状況を次代の当主へと伝えるため、「乍恐由緒荒増之覚」¹⁶が作成され、領主に差し出されたのである。ここでは、これらの由緒の真偽について問うことはしない。湯浅家が有すると思われる数ある由緒が、ある郷士、湯浅五郎兵衛宗成に政治世界への「志」を芽生えさせた。近世村落に存在するある郷士の「草莽」化のきっかけとなったことに注目したい。

(2) 肥後藩の攘夷意識と草莽

湯浅五郎兵衛宗成（以下、湯浅とのみ記す）における政治世界への「志」はいかにして形成されたのか。

語られた由緒が如何にして政治への「志」を生み出すのかについて、これを裏付ける史料（日記、書簡など一次資料）は存在しない。手がかりとなるのは、湯浅に関わりを持った人間によって書かれた史料、またはその人間のことを書いた編纂物ということになろう。

湯浅家文書に伝存する「勤王志士東簡」は、湯浅と政治的関係の深かった人物からの来翰が表装された卷子である。¹⁷この卷子には、肥後藩および土佐藩関係者の書状が複数収められている。ここでは、肥後藩士、なかでも特に親交を深めた肥後勤王党の人びとの政治動向を分析することにより、湯浅の幕末期における政治行動の前提について考察していく。

嘉永六年（一八五三）、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーの浦賀来航によって、日本には大きな衝撃が走った。徳川幕府は、旗本、全国諸大名、藩士、民衆にいたるまでその対応策を問う。加えて、徳川幕府の拠点たる江戸を諸外国から守るべく、江戸湾防備の強化をはかり、江戸湾内海の海岸に、海防のための「台場」が建設される。大名家は、この完成を前にして、近世を通じて担ってきた徳川将軍への軍役を遂行するため、江戸湾各所の警備に当たった。川越藩松平家、会津藩松平家、忍藩松平家、彦根藩井伊家の譜代および徳川家門に加え、長州藩毛利家、鳥取藩池田家、岡山藩池田家、柳川藩立花家、肥後藩細川家の西国の外様大名家がこれに動員された。¹⁸

肥後出身の永島三平は、細川家一門の長岡内膳（のち細川休焉）の臣、つまり陪臣であり、儒学を藩校時習館教授の近藤淡泉、国学を林桜園の原道館に学んだ後、江戸に出て、吉田松陰や藤田東湖と相まみえた人物である。文武に長じた豪放の士と評される永島をはじめ、肥後藩内の人間には、林桜園の思想に大きく影響された人が数多く存在した。林桜園は、肥後藩内における勤王思想の源泉と評される人物で、藩内外に

一〇〇〇名を超える弟子がいたとされる。林桜園は国学者にありがちな、固陋な勤王家ではなく、賀茂真淵、本居宣長流の国学に加え、西欧の兵学、天文学の研究にも取り組んでおり、弟子にオランダ語、英語の原書講読を勧め、それこそが有能な人材育成であると主張しており、当時の社会状況に適した教育方針であったといえ、多くの門下生が存在したことも首肯できる。¹⁹⁾

永鳥の時局観は、その師、林桜園の思想に強い影響を受けたものであるといえ、このことは肥後勤王党を組織する人間の政治視角に共有されるものであった。

次の史料は、江戸湾警備のため上京してきた永鳥が、養父である永鳥繁平、肥後勤王党の中心人物で山鹿流の兵学者であった宮部鼎蔵、藩主侍講として越前福井に赴く前の横井小楠らに宛てて出した嘉永六年（一八五三）九月一〇日付の書簡である。

（前略）異船之儀、誠ニ以不容易事ニ御座候処、異船帰帆後は又々元ニ帰り、諸詰込之人上下酒色ニ沈酔仕り、歌・三味線二日を送り申候段、誠以歎ケハ敷次第二而風前之燈同然ニ御座候、（中略）太平を祝し、国中正義之士を遠ケ己か徒党を引挙ケ、乍恐上之御目を暗居中、海防凶荒之備等哉、且士氣を起、文武を奮等之筋申候人ハ未熟と心得、子供狂人同様ニ取扱居申候（中略）当時天下之諸公何れニも皆同様之事ニ而、是なりニてハ公儀よりも今暫ハ御手も付申間敷、左候得は来年之合戦愈以百敗ニ御座候而、御国二百余年之御武名一朝ニ消滅仕候而已（中略）御国砲銃は如何ニ御座候哉、とても兵制は日本刀・槍を本とし、西洋砲銃之節制を取り申候而軍仕り不申候而は勝算は無御座候、然ば有志人々は一刻も早く西洋砲術稽古御打立ニ相成申度、是又神懸て奉祈候（以下略）²⁰⁾

永鳥の問題意識は、当該期の攘夷主義者にありがちな西洋諸国を「夷狄」と解し、即時その掃攘を求める

ものではなく、ペリー艦隊の離日後、「酒色に沈酔」し、「歌・三味線」に興じるような怠惰な国内の状況に向けられ、いっこうに士気の奮わない徳川幕府の姿勢を批判している。無論、永鳥が書状をしたためたのは、ペリー来航からおよそ三カ月後のことであり、その段階で、幕府の海防の是非を問うのは、尚早というものであるが、幕府は徐々に江戸湾防備の充実化を推し進めていた。天保十三年（一八四二）より、川越藩、忍藩によって房総半島の警備が担当されており、弘化四年（一八四七）からは、彦根藩、会津藩を加えた分担保体制によって対応されていた。ペリー来航の後、幕府は海防掛本多忠徳らによる海岸巡視の結果、富津岬と観音崎を結ぶラインの内側の内海警備に重点が置かれ、その任務は会津藩から柳河藩へ、忍藩から岡山藩へと引き継がれ、外様藩主体の警備へと転換していった。永鳥の抱いた幕府海防の現況への批判的解釈はそのまま、肥後藩内において西洋流砲術を導入し軍備充実化をはかり、人材登用を求める動きとなって現れた。安政期における大名家の政治運動の特徴は、大名家の政治行動が中央政局において顕在化しないことであった。そのために在野から少しでも多くの有志人材を見いだし、連携することが必要であった。丹波国に存在した「ある郷士」は、肥後藩において必要な「草莽」として認識されるに至るのである。

(3) 湯浅五郎兵衛の政治的意義

肥後藩士松田重助は、藩主公子長岡澄之助（のち肥後藩主細川護久）に附属し、安政期より藩外交の最前線で調整役として動いた人物であり、維新後、京都府知事や農商務大臣に就任した政治家山田信道の実兄にあたる。先述の永鳥におくれて、江戸にやってきた松田は、分立する肥後藩内の政治党派である学校党、実学党、勤王党を統一し、さらに長岡澄之助を速やかに上京させることを目指した。

松田重助は、肥後藩細川家の旧領である山城国西岡地域と、天皇家との由緒を有する大和国十津川郷の郷士を説き、「義拳」の原動力とし、細川家当主の血統を引くとされる湯浅をその首領に擁立し、湯浅家が許された細川家の家紋「九曜」を旗印に国事への奔走を図ったのである。

さて、永島三平と松田重助、この二人の肥後出身者には嘉永六年の段階で、湯浅に関する共通認識があった。熊本大学永青文庫研究センターに所蔵される「丹波国湯浅左右司御助力願一卷控」²¹がこれを裏付ける史料である。同史料は、文化六年（一八〇九）に細川家において作成されたもので、「丹波国郷士湯浅左右司儀、追々御先祖様方御由緒有之候ニ而、先年御国江罷下り御助力筋之儀願出」たことへの細川家による対応と、助力を請う湯浅家の現状について調査し作成された。文化年間、細川家は、湯浅家が主張する細川家との関係性から生じる由緒を「一向不相分候付御取上ニ相成不申」として、一旦は却下したが、湯浅家からの度重なる歎願に対し、細川家においてもその再検討を余儀なくされ、湯浅家の由緒と細川家の履歴に関する調査がなされ、湯浅家の所在する丹波国上木住村の位置の他、戦国期より近世初期の細川家と湯浅家の関係性、殊に、天正八年（一五八〇）以降、丹波国が明智光秀の支配となった後の経緯が事細かに記載される。これによって、湯浅家が語った由緒は、細川家においても認可され、毎年の助力金が湯浅家に下されていた。由緒をめぐるてなされた調査によって、細川家は丹波国に湯浅の存在を確認し、この延長線上に、肥後藩士松田重助の丹波国上木住村への来訪を理解できうるのである。

安政四年（一八五七）五月、松田重助は、丹波国上木住村の湯浅家を訪れ、共に混沌とする国内政治に対し、「志」を立て、立ち上がるべきとの説得をおこなう。松田の要請を図らずも受ける立場となった湯浅であるが、この後の活動状況を踏まえて考えても、肥後細川、なかでも肥後勤王党の代理人的存在であったことは間違

いない。しかしながら、これまでの生活環境を投げうって、国事に奔走することを選んだ湯浅には、その志の方向性を定める用意はできていたと考えてよい。段階を追えば、中世から近世移行期における細川幽斎との関わりが、文化年間に由緒として唱えられはじめ、また天保年間には、細川家と結びつきが非常に深いことによって、自己を正当な存在へと意義づけている。湯浅は、自家の由緒を知り、丹波郷士である自らが時局に対してなにをなすべきかを悟っていた、と考えたい。

国事への奔走を誓い合った湯浅と松田重助は、京都に出て、当時、小浜藩を脱し、京都において私塾「望楠軒」を主宰していた梅田雲浜や、雲浜の門弟で、川島村（現、京都市西京区）の有力な郷士であった山口薫次郎とその行動方針につき協議する。この折、梅田をはじめとする志士は、異国船を江戸湾ではなく、大坂湾に迎え入れ、これを遊撃する計画を立てていたといわれる。これにともない、天皇が住まう禁裏に危険が生じるということで、玉座を高野山へ遷す計画が立てられた。この準備として、五郎兵衛と松田は京を発って高野山に赴き、同所の塔頭西法院に滞在し、同寺を拠点に入説活動をおこない、西法院の住職をはじめとする高野山関係者より同意を得たとされる。同年一二月、帰京した五郎兵衛らは、川島村山口薫次郎邸を拠点として、同志の糾合に努め、翌安政五年（一八五八）五月、丹波国上木住村に帰郷する。

折悪しく、同伴した松田に細川家および幕府より脱藩および隠密工作の嫌疑がかかった。松田はすぐさま丹波をあとにし、湯浅と縁のある河内国富田林の庄屋越井庄助方に身を寄せる。同地において越井らの斡旋のもと私塾を開いた松田は同志を募り、のちに天誅組河内勢の主要メンバーとなる水郡善之助、三浦市之助、長野一郎ら河内郷士と面識を得る。⁽²⁾湯浅も、松田に遅れて河内に入り、行動を共にしたとされる。松田重助が、知己の国学者藤本鉄石に出した書状には、「扱兼而御噂申上置候丹州湯浅五郎兵衛罷出候間、無御隔意御教示

被成下候様奉願上候、未タ未熟人ニ御座候得共、性質義勇之士ニ御座候間、御難題ニ罷成候ハ、追々用立之見込御座候、何分宜敷奉頼候⁽²³⁾と、安政大獄の折、幕吏に追われ、潜伏中の自らに代わり、湯浅を用立てよう紹介している。大正五年（一九〇〇）に発行された『船井郡世木村誌』所収の「湯浅五郎兵衛伝」のほか、湯浅の事績に関する説明文などからは確認できないが、松田は、富田林にとどまらず、京都の青蓮院宮尊融法親王（のち中川宮朝彦親王）へ入説し、また、密かに熊本に帰り、藩情の確認に赴いていたことが、『改訂肥後藩国事史料』所収の史料から確認でき、湯浅の行動についても、松田に同じく、さらに活発化していったことが推察される。

2 幕末政治に活かされる「草莽」

(1) 肥後藩と湯浅五郎兵衛の政局観

文久二年（一八六二）、大名家の政治運動が活発化していく。文久二年四月、薩摩藩主島津茂久の父、島津久光の率兵上府をめぐる国事周旋運動が、諸藩の政治行動の先鋭化を誘発したことは、先行研究において明らかである。⁽²⁴⁾殊にそれは、薩摩の隣国、肥後藩においては他藩に比して顕著であった。

次の史料は、肥後勤王党の魚住源次兵衛が、文久二年三月、肥後藩政府に対して提出した建言書の一部である。魚住源次兵衛も、林桜園門下でその影響を受けた人物であった。

（前略）此節島津和泉殿（久光）出府之儀は、不容易筋も有之候段承申候間、御近藩之儀其俣聞捨には難罷在（中略）彌以此節は於京師義挙有之候様子（中略）方今天下有志之諸大名より御当藩を概見仕居候所は、癸丑（嘉永六年）以降之御処置を根とし、彦根藩純粹之御同意と奉存候趣に而、（中略）肥後人と

申候得は、幕府之間諜同様に見成候而、忝人も其国情を明かし、其内実を語り候者無之、(中略)勤王ハ列藩ニのみ致させ、御当国よりハ一人も義徒無之候而は、事成乱平之后、何之面目ありて天下之人ニ面を合せ可申哉(以下略)⁽²⁵⁾

文久二年三月段階で、薩摩、長州の他、大名家による率兵上京がおこなわれるのと、時を同じくし、京坂において有志たちによる義挙が決行されることを前提として、肥後藩当局に奮起を求めたいが、この参加に当たり、肥後藩には大きな障害があるという。嘉永六年、ペリー来航以後の肥後藩の政治方針が、「幕府之間諜同様」と見なされており、誰一人としてその胸中を明かすものがない。肥後藩からも義挙に参加し、活躍できうる人物がなくては、同藩士として面目が立たないと述べる。

魚住ら肥後勤王党は、一門の長岡内膳(のち細川休焉)に「備」(大名家の軍制上の単位)を編成させ、上京を画策するも、正面から事を成そうとすれば、徳川將軍家の威光に背く形となるから、丹波国に隠密裏に兵を派遣し、湯浅を首領として挙兵することを計画する。この折、松田重助は、九曜の紋入の大將旗と兵士の着用する一〇四個の肩印を拵えて持参し、出陣に備えたが、この義挙に同調していた久坂玄瑞ら長州藩勢との足並みが揃わず、計画は未遂に終わった。

挙兵計画当初、湯浅が、文久二年五月、肥後藩京屋敷の留守居衆中に宛てた願書によれば、助勢を志願するも、一八〇あったとされる家来筋の家々への藩からの手当てが滞っていることを憂慮している。事が起これば、すぐさま肥後藩京屋敷へ駆けつける所存であるが、自身を含め家来筋の武備が調っていないので、相應の武具を拝領できるように求めている。さらに、「公武御合休神州之武威を海外ニ輝候御儀ニ相成候歟」と、長州藩長井雅楽による京都入説の成果をふまえつつも、兵端が開かれることは確実であるとし、「嶋原御陣之

御先祖時哉儀、人数召連罷下り御助勢申上候節、御意之趣も有之、代々申伝候家訓も御座候間、若非常之節二至候ハ、何方ニ不限御旗本ニ駆付候は勿論、家格相守申居候」⁽²⁶⁾と、寛永一四年（一六三七）、島原の乱の際、当時の湯浅家当主時哉が率兵して細川家に加勢した由緒を理由に、いつ何時でも細川家を助けるのは湯浅家の家訓であると主張している。文久二年の義拳は未発に終わったが、湯浅はその由緒を根拠として、積極的に肥後細川に働きかけをおこなっていた。結果として、本願を遂げられず、湯浅は兵を収めて帰郷したが、その折、園部藩より不穩策謀を疑われて捕縛され、一五〇日間の入獄を余儀なくされる。その釈放に当たっては、湯浅の政治的存在を認める肥後藩はともかく、長州藩からも助命の働きかけがあったとされる。長州藩においても草莽の京における政治的有用性に気づき、湯浅の釈放を求めたことになる。

(2) 「草莽」の主体性

釈放後、ふたたび京に出た湯浅は、長州藩勢との結びつきを深めていく。文久二年一月、長州藩勢は、京の本陣として嵯峨の天龍寺に本陣を求め、その斡旋を川島郷土山口薫二郎と湯浅に求めた。『船井郡世木村誌』によれば、湯浅らは、天龍寺門前の嵯峨において材木商を営み、天龍寺の用達を務めた福田利兵衛を毛利家に紹介し、天龍寺および周辺村落の拠点化を助けた。福田はこの後、長州藩用達として、京都における藩業務の委託を受ける存在となるので、湯浅の仲介によって福田を見出した長州藩は、京における代理人的存在を草莽より見いだし、拡充していくことになる。⁽²⁷⁾

湯浅は当時、分家の榊屋湯浅喜右衛門家を、近江出身の学者古高俊太郎に継がせ、同家を京の拠点として政治活動を展開していた。⁽²⁸⁾その活動は、政治世界の前面に出るものではなく、榊屋に出入りする長州、肥後、

土佐、鳥取などの藩士の支援と情報提供であった。

しかし、文久三年（一八六三）八月、前年末より急進的な政治運動を展開し、大名家の国事運動を主導してきた長州藩を政局から一掃させようをもくろむクーデター、いわゆる文久三年八月十八日の政変が勃発し、同時に、前侍従中山忠光を首領とし、土佐藩吉村虎太郎ら天誅組拳兵、前後して但馬生野でおこった同志たちの拳兵が鎮圧されるや、地方有志を糾合し展開されてきた大名家の政治運動は、破綻をきたしていく。

政治運動の破綻を食い止め、くわえて政変によって、冤罪を被り、失墜した長州藩の政治復権をはかるべく、翌元治元年（一八六四）六月、京都において、肥後脱藩の宮部鼎蔵、同じく、肥後脱藩で、湯浅の同志であった松田重助および長州勢は密議をおこない、京都において義拳決行を企てる。この折、宮部らは、禁裏に火をつけ、天皇を奪おうと画策したとされるが、新選組の捜査によって明るみにで、京都三条小橋の池田屋の密会現場にふみこんだ近藤勇ら新選組と乱闘、いわゆる池田屋事件となり、宮部、松田らが落命する⁽²⁹⁾。

池田屋の密会には関与せずとも、共犯を疑われた湯浅は捜査の目を潜り抜け、伏見、堺、岡山、長州へと姿、名前を変えて潜伏し、慶応二年（一八六六）正月、京都に戻る。確認できる湯浅の事績のなかで、その底本となっているのは、西川太治郎編『池田屋事変殉難烈士伝』（一九〇四年）である⁽³⁰⁾。同書は実証にもとづいて書かれたとは考えにくく、その叙述をそのまま受け入れることはできないが、ここでは、湯浅の政治動向を把握するための指標として用いることとしよう。

池田屋事件による京市中の混乱のなか、湯浅は川島村の有力者、革島兵庫（有尚）宅に身を寄せた。革島家は、湯浅家と同様に肥後藩との縁故を有した葛野郡川島の有力郷士で、大名家による政治運動を後方支援する活動を展開していた⁽³¹⁾。しかしながら、革島家へも捜査の手が伸び、湯浅は、仏光寺壬生川に立地した肥後

藩京屋敷へ匿われることとなる。こののち、湯浅は大坂へと向かい、一ヶ月ほど潜伏したのち、堺の樽屋政次郎宅に「鉄砲職人住屋栄吉」と名を変えて住居し、約一年を過ごすも、慶応元年（一八六五）六月六日、樽屋に会津藩の捕手一三名が押しかけ、再度逃走することとなった。

慶応元年六月八日、再度、川嶋村革島兵庫を訪れた後、鳥取藩周旋方の松田正人の執り成しで鳥取藩伏見屋敷に二〇日間潜伏する。鳥取藩士を介して、備前岡山にて同藩士斎藤治部之助、同藩家老土倉弾正と会合し、同所に潜伏中の水口藩士豊田謙次とともに、八月、山口へと向う。同地において、笠間藩出身の儒学者で、当時長州藩校明倫館教授方を務めた加藤有隣や二見一鷗齋と会合し、「攘夷先鋒撰海総督の重任」を長州藩主毛利敬親に任じるよう、関白二条斉敬に願ひ出ることに決し、二見一応齋とともに、上京の途につく。「売薬商関亦蔵」と名を変えて上京した湯浅は、二条斉敬と関係が深い山中法橋を通じて願書の提出に成功し、ふたたび山口に戻った。

慶応元年二月二八日、湯浅は、長州藩士桂小五郎（のち木戸孝允）、同品川弥二郎および薩摩藩士黒田了介（のち清隆）、土佐出身の田中光顕らに同道し、周防国三田尻より船にて兵庫へ向かい、同所通航中の薩摩藩船に便乗して、土佐堀の薩摩藩大坂蔵屋敷に入る。翌日、薩摩藩伏見屋敷において西郷吉之助（のち隆盛）、黒田嘉右衛門（のち清綱）と面会し、のち相国寺門前二本松の薩摩藩京屋敷に一〇日間滞在した。桂ら長州勢の上京理由が、薩摩藩との軍事同盟締結のためであることはいままでもないが、盟約締結前、薩長両藩の政治的緊張関係に湯浅は直に接していたことになる。

この後、王政復古を唱えて、朝譴を被り蟄居の身であった公家鷲尾隆聚郎において、慶応三年（一八六七）一〇月まで潜伏し、政治活動に従事する。

以上の経緯から、湯浅について次のことがいえよう。まず、担うべき政治活動の幅が、著しい拡がりを見せていることである。松田重助ら肥後勤王党の政治方針になかば沿うかたちであつた湯浅の行動が、長州藩、鳥取藩、岡山藩、そして薩摩藩との関係を持つことにより、当該期の政情に見合つた運動へと転化している。元治元年七月、禁門の変以来、「朝敵」となり、処罰の対象となつていた長州藩主毛利敬親を「摂海総督」に就任させようとする湯浅らの主張は、当時、「禁裏守衛総督摂海防御指揮」として徳川慶喜が在京の政治勢力を統括する徳川幕府を批判する固陋な政治志向より出たものとも解することができる。しかし、慶応元年閏五月、幕府は、將軍徳川家茂が進発上京して、孝明天皇より長州再征勅許を得ようと動きはじめており、これに対し防長近隣の領主、なかでも岡山藩、芸州藩などが止戦を唱え、大坂湾における「攘夷」行動を主張することで、内乱状況を回避しようと政治運動を展開していた。政情を自ら確認して考え、あらたな政治潮流を生み出そうとした湯浅は、もはや、肥後藩の代理人的存在ではなく、世情が望みうる主体性を持った草莽へと転換を遂げていたといえよう。

湯浅に関する人物評には、長州藩と薩摩藩との提携に尽力したことや、薩長同盟を締結するべく京都にやつてきた木戸孝允に同行したことが強調されて記されているが、³²実際にこれを裏付ける史料は伝存していない。しかし、薩長両藩の提携は、もはや第一次長州戦争後の政治状況においては、両者が選ぶうる有力な選択肢となつており、このことは当時、長州に赴いていた肥後勤王党出身の人間や、内乱回避を目指す防長近隣の大名家の主張からもうかがえ、湯浅もこの結びつきを支持したということになる。

慶応二年正月からおよそ二年間、潜伏先となり、行動をとにもすることになる公家鷲尾隆聚との政治的關係および活動内容については未詳であるが、前出の「勤王志士束簡」中、湯浅に対し、鷲尾隆聚を訪問した

ことを報じた肥後藩士上野堅吾の書翰⁽³³⁾、維新後、五条県（現在の奈良県の一部）知事となった鷺尾に対し、弟子を雇用してもらおうと、湯浅に紹介を求める加藤有隣の書翰⁽³⁴⁾からも、慶応二年から翌三年における湯浅と王政復古派公家との極めて親密な関係性をうかがうことができよう。⁽³⁵⁾

3 「志士」創造と日本近代

(1) 「御一新」が草莽にもたらしたもの

慶応二年（一八六六）一〇月、肥後藩京都留守居役浅井新九郎、同役井口貞助らが在京の肥後藩士によって、京都守護職の会津藩松平家および園部藩小出家に対し、湯浅五郎兵衛の嫌疑がはれるよう照会がなされた。先述のとおり、湯浅は鷺尾隆聚邸に潜伏中で、丹波国上木住村に帰ることのできない身であり、園部藩小出家より裁かれ、自邸へ帰宅の上、蟄居が命じられたのは慶応三年一月のことであった。時すでに、徳川慶喜より朝廷に対して大政奉還がなされ、二六〇年余りつづいてきた徳川の世はまさに終焉を迎えていた。

「御一新」の後、元号が改まった明治元年（一八六八）九月、湯浅は、肥後藩細川家より「外向御用懸京地詰」、すなわち京都駐在の国事周旋役への就任を求められ、藩より正式な扶持を与えられることになった。また、翌二年二月、肥後藩士加屋栄太らとともに岩倉具視へ附属することが命じられ、京坂地域の政治情報収集に当たった。同年六月には、桂御所奥警衛役となり、同所の警護をおこなった。以上のことは、大名家主体に展開された政治運動の影となってきた湯浅の志が大名家および、明治政府により公認されたことを意味しよう。

(2) 近代に問われた「格別」

明治四年（一八七二）七月、明治政府は廃藩置県を断行し、旧大名家による政治分立の状況を改め、中央集権化をはかった。旧大名たる細川家より禄を受けていた湯浅も、同年七月、肥後藩京屋敷の引き払いにより、その職を解かれ、丹波に帰郷する。彼は、その後、政治に身を向けることはなく、明治四二年（一九〇九）九月一三日、七五歳でその生涯を終える。幕末期に自らを突き動かした「志」は、維新後、彼自身の口から発せられることはなかったことになる。

丹波に戻った湯浅の近代について考えたい。明治七年（一八七四）、板垣退助らにより民撰議院設立建白書が提出されて灯された民権運動の火は、全国へ波及し、同年七月、京都府においても丹後宮津に天橋義塾が創設され、三丹（丹後・但馬・丹波）の自由民権運動を主導していた。⁽³⁶⁾

京都府下における自由民権運動が高揚していくのは明治一三年（一八八〇）以降のこととなるが、宮津の天橋義塾関係者による民権運動主導の状況に対して、桑田、船井両郡は同調の姿勢を示さなかった。事実、明治一三年（一八九〇）、帝国議会が開かれた際に、宮津は自由党の地盤になったのに対し、亀岡は反政党（反自由党・反立憲改進黨）と中立・社会改良・地方の公益を主張する京都公民会の地盤となった。京都公民会は、明治二二年（一八八九）から二五年にかけて、京都の都市商業者および郡部の地方名望家層によって組織された政治結社であり、丹波における地方有力者は、反政党（反自由党・反立憲改進黨）を標榜し、かつ地方の公益を主張する結社、京都公民会を支援した。この背景には、近世以来の丹波地方における有力者の地縁的結合の象徴といえる近世以来の「弓射連中」と称するグループと、慶応四年（一八六八）正月、山陰道鎮撫使による召集に応じた丹波弓箭組の存在があった。

明治五年（一八七二）以降、弓射会の再興がなされて、弓射による鍛錬が見直され、明治一六年（一八八三）三月、元京都所司代与力で弓の名手として名高かった石崎長久によって「養気社」が設立され、スポーツとしての弓道の再興が目指された。石崎の目指すところは、桑田・船井両郡に所在する丹波弓箭組、同窓者の組織化であったが叶わず、明治二年（一八八八）一〇月、南桑田郡馬路村（現、亀岡市馬路町）の人見龍之進・同郡保津村（現、亀岡市保津町）の村上内蔵太・同郡北金岐村（現、亀岡市大井町）の渡辺治部衛門が呼びかけ人となり、在地有力者は糾合され、「丹波国桑田船井両郡弓箭組」として組織化された。ここに、石原半右衛門、田中吾内とともに、湯浅五郎兵衛が船井郡の在地有力者として名を連ねたのである。³⁷⁾

前近代において、弓射に長じた人々の集団が、維新後、地域の名望家により主導される集団となり、政治結社「京都公民会」の地域母体勢力となりえた。船井郡では、近世以来、弓射会などを通して在地の有力者が地域を越えての団結をおこない、村の自治意識を高める一方で、地域内の席次を定めて、村内秩序の維持を図っていた。かたや、自由民権運動は、天賦人權思想による機会の平等と能力主義というあたらしい西欧思想に影響された運動であり、その思想の実現の一步として国会開設と参政権と自治が要求された。したがって、家格による自治を重視する弓箭組の思想とはかなり異なっていたのである。湯浅五郎兵衛ら養気社に賛同した近代の弓箭組の人びとは、近世より存在した地域内の秩序や格式を重んじた地方名望家であった。

先にみたように、天保一二年（一八四〇）七月、湯浅五郎兵衛家の当主、宗精が作成し、園部藩小出家に提出した由緒書において、幼年の又左右（のち五郎兵衛宗成）へ跡目相続するに当たり、他の郷土との「格別」を主張し、「同列」に扱われることを嫌った。それは、湯浅五郎兵衛家が未来永劫にわたり存在し続けていくためであった。湯浅五郎兵衛家の由緒は、在地社会における自己の差別化のために語られ、五郎兵衛宗成に

においても、政情混沌の折、自家のありようを見つめなおすことで自らの立ち振る舞い方を定め、たとえ危険を伴う状況に置かれても、その志に従って行動していくことが、家の優位性を保持し、永続的に存続するための手段と判断された。近代の地域社会においては、前近代の村落社会に存在した秩序や秩序によって裏付けられる序列の固持を求める考え方が存在し続けた。このことは、明治二三年五月、その前年に公布された市制・町村制に続き、郡制が公布され、近代地方行政の制度的定着が図られるも、旧制度の整理、転換事業との兼ね合いで、直ちに施行というわけにはいかず、京都府内の郡制施行は、明治三二年（一八九九）までずれ込む形となった事実からもうかがえる。前近代の秩序や規範がしみ込んだ村落社会のありようを肯定的にとらえる思考の存在が、あたらしい地域社会の創出に歯止めをかける形になったのである。

(3) 贈位事業と「志士」

あらたな地方行政制度が立ち上がりとしていた明治二〇年代後半、丹波地方において、湯浅の功績を称えるべきとの声があがる。南桑田郡稗田野村（現、亀岡市稗田野町）の大石彦三郎が、船井郡長の有吉三七に、湯浅の事績を添えて、「丹陽ニ於テ有名ナル勤王家ニシテ其王事ニ尽力被為候義ハ無隠吾人ノ知ル処ニシテ未ダ其筋ノ御詮議無之ハ丹陽郡民ノ不審ヲ抱ク処ニ有之」として、湯浅五郎兵衛をあらたにできあがる船井郡域、ひいては、桑田郡を含む「丹陽地域の誇り」として、その精神的支柱に据えようとする構想である。大石は、明治政府による維新功労者の調査事業を聞き及び、所属管内が異なるも、湯浅を政府に推薦するように申し出たのである。具体的には明治二〇年代、政府が推進してきた維新功労者の調査、顕彰とその証しとしての位記書・位記贈与通知書の授与を、湯浅にも適合させて、実現させようという動きであり、実際、湯浅への

従五位贈与は、大正四年（一九一五）に実現の運びとなる⁽³⁹⁾。

湯浅の例に限らず、明治二〇年代後半から昭和初年にかけて、忘れ去られかけていた幕末期の志士を顕彰する動きが、各地で見られるようになる。

湯浅の顕彰と贈位実現の状況を受け、愛知県刈谷町（現、愛知県刈谷市）の津田信吉から、湯浅の子息、湯浅達三に宛てられた大正一四年（一九二五）二月一二日付の書簡がある⁽⁴⁰⁾。津田信吉は、『奎堂松本先生二就テ』⁽⁴¹⁾と題した松本奎堂の伝記を書いた人物で、湯浅の贈位の顛末を聞きつけ、「志士」顕彰の方法について問うとともに、今ひとつ把握できていない松本奎堂の安政五年頃の足取りについて尋ねている。天誅組の巨魁として大和国にて挙兵し、自刃した「志士」松本奎堂の事績とはいえ、安政五年の時期はまだ松本も地下活動の状態にあり、わかりづらくて当然ではある。

津田信吉による松本奎堂の事績調査および伝記刊行同様に、大正期から昭和初年にかけて、「志士」として称えられた人物の出身地では、石碑が建造されて、その事績が碑文にしたためられ、また「郡誌」、「町誌」などの書籍には、崇高な業績として説かれた。このことは、「志士」たる人物の行動を、国のために出征してゆく「臣民」像と重ね合わせることで、近代日本人の「あるべき」モデルを創造したことにはかならなかった。湯浅、松本奎堂に限ることなく、同様の行為は、その人物が「志士」であったことに対する評価を一人歩きさせ、明治維新という時代変革そのものをも手放しで賞賛するという現象を生み出したのであった。

むすびに

本稿では、ある丹波郷土湯浅五郎兵衛の政治意識の形成と政治行動および近代における地方名望家としての存在について考え、近世に語られた由緒が、幕末維新期の草莽としての行動を生み出し、さらには近代において「志士」として顕彰されたことを、紐づけて考察した。

改めて、「志士」とは、近代日本の歴史観のなかに構築された清廉で潔白なるイメージで説明づけられる人物および人物に対する賛辞である。明治維新というわが国において類をみない大きな変革は、徳川將軍の下に築かれた巨大な前近代の封建的政治社会が、民衆を抱合した大名家臣有志によって打倒されるという枠組みで理解されてきた。旧体制を打倒する側に立って、立ち回りの緩急は問わず、封建的抑圧から解放放たれた「すばらしき時代」の到来を実現させたのは、「志士」であると解釈されたのである。

このような明治維新と「志士」との連関性を証明しつづけたのが、近代における歴史編纂であった。あらたな政府の成り立ちについて、政府レヴェルにおいては、明治三二年（一八八九）に編纂が完了した『復古記』がそれにあたり、これに続いて岩倉具視や三条実美といった旧公家層や、明治の「元勳」と称された政治家においても「伝記」編纂がなされた。また明治政府は旧大名家に対しても「勤王事績」の調査、報告を求め、この継続事業として「藩史」や「家史」が編纂された。昭和初期となると、昭和三年（一九二八）の昭和天皇即位と昭和十五年（一九四〇）の紀元二六〇〇年記念の意味を込めて、維新以来の歴史が振り返られるようになる。さらには明治維新を「王政復古」の観点から価値付けるために、全二〇〇巻余にのぼる「日本史籍協会叢書」が編纂されるのも、大正末期から昭和初年にかけてのことである。

明治維新の歴史は、明治から昭和初期における日本の揺るぎない建國神話として位置づけられてきた。そのために「志士」、あるいは「尊王攘夷」、「武力倒幕」といった特有の理解が生み出され、それらを定着させるために歴史書が編纂され、学校においては、歴史と修身によつて肯定的に説明づけられ、さらには明治神宮、平安神宮といった公共性を表象する空間施設が創り出されてきた。これらの事象はわれわれの生活になにをもたらしめているのか。この構造について考えることは、現代社会がなにに立脚しているのかを解明することにつながるであろう。

注

- (1) 松村彰『大辞林』第三版、二〇〇六年、新村出編『広辞苑』第七版、二〇一八年。
- (2) 幕末の「志士」像を検討した拙稿に、笹部昌利「攘夷と自己正当化―文久期鳥取藩の政治運動を素材に―」(『歴史評論』五八九号、一九九九年)、同「人斬りと幕末政治―土佐藩山内家の政治運動と個性」(『鷹陵史学』三二号、二〇〇五年)、同『幕末動乱の京都と相国寺』(相国寺、二〇一〇年)などがある。参照されたい。
- (3) 久留島浩「村が『由緒』を語るとき」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団―由緒と言説―』山川出版社、一九九五年)。
- (4) 井上政『由緒書と近世社会』(大河書房、二〇〇三年)、同「幕末期における「国」の主張と由緒秩序」(『歴史学研究』八四七号、二〇〇八年)。
- (5) 山本英二「創り出される由緒の家筋」(白川部達夫・山本英二編『村の身分と由緒』「江戸」の人と身分二(吉川弘文館、二〇一〇年)。
- (6) 坂田聡編『古文書の伝来と歴史の創造―由緒論から読み解く山国文書の世界―』(高志書院、二〇二〇年)。
- (7) 近世後期から維新期にかけての、伝説、歴史観と天皇制を論じた研究に、吉岡拓『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇』(校倉書房、二〇一一年)がある。
- (8) 佐々木克『志士と官僚明治初年の場景』(ミネルヴァ書房、一九八四年)。

- (9) 高木俊輔『維新史の再発掘 相楽総三と埋もれた草莽たち』（日本放送出版協会 NHKブックス、一九七〇年）、同『明治維新草莽運動史』（勁草書房、一九七四年）、同『幕末の志士―草莽の明治維新』（中公新書、一九七六年）、同『それからの志士もう一つの明治維新』（有斐閣選書、一九八五年）、同『戊辰戦争と草莽の志士切り捨てられた者たちの軌跡』（吉川弘文館、二〇一二年）。
- (10) 藤田英昭「八王子出身の幕末の志士川村恵十郎についての一考察」（松尾正人編『近代日本の形成と地域社会』（岩田書院、二〇〇六年）、同「草莽と維新」（明治維新史学会編『講座明治維新』三、有志舎、二〇一一年）同『徳川慶喜と幕末の志士』（『徳川慶喜公伝』と洪沢栄一 展示記録・講演録』洪沢史料館、二〇一四年）。
- (11) 湯浅五郎兵衛の人物情報については、井尻良雄編『園部藩別格上席待遇の郷士湯浅五郎兵衛家由緒書』（船井史談会・旧世木村誌編纂委員会、一九五八年）、船井郡教育会編『船井郡誌』（船井郡教育会、一九一五年）、井川市太郎編『丹波及丹波人』（丹波青年社、一九三二年）などを参考にした。なお、笹部は、日吉町郷土資料館における企画展「湯浅五郎兵衛と幕末維新」（二〇〇四年開催）に協力し、企画展図録『湯浅五郎兵衛と幕末維新』に資料解説およびコラム、講演録を掲載した。参照されたい。
- (12) 湯浅家文書中、湯浅家の由緒および類書については、作成年代が判定できるものを示せば、次のとおりである。「家譜記録草稿虎部」（寛政九年（一七九七）、No. 三一一―三七）、「家譜断同附録古事談湯浅家」（文政九年（一八二六）、No. 三一一―一〇）。寛政年間に書き起こした家譜に付随する情報を加え、天保年間に領主へ提出した由緒書を完成させたと推察される。
- (13) 前掲『園部藩別格上席待遇の郷士 湯浅五郎兵衛家由緒書』。
- (14) 細川忠利は湯浅五郎兵衛家の甥にあたり、湯浅家文書には細川忠利書状五点が含まれる（No. 五一一―一三、九、一〇）。
- (15) 湯浅五郎兵衛宗成は、丹波国桑田郡の大石家に生まれ、湯浅家に養子として迎えられた。湯浅家文書には「丹波国桑田郡大石家譜」（No. 四一五）があり、包紙上書に「五郎兵衛宗成之持参」とある。
- (16) 偽文書が作成されることの意義については、馬部隆弘「椿井文書―日本最大級の偽文書」（中公新書、二〇二〇年）、同「これからの椿井文書研究のために―椿井家と今井家に関する基礎的考察―」（『日本史研究』七〇九号、二〇二一年）、山本英二「近世の偽文書―武田浪人を事例に―」（久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』柏書房、二〇〇四年）参照。

- (17) 「勤王志士束簡」(南丹市日吉町郷土資料館蔵「湯浅家文書」No. 五——二二)。
- (18) 原剛『幕末海防史の研究』(名著出版、一九八八年)。
- (19) 荒木精之編『巨人林松園』財団法人神風連資料館、一九八一年。
- (20) 『改訂肥後藩国史料』巻一、国書刊行会、一九七三年復刻、一九二—四頁。
- (21) 「丹波国湯浅左右司御助力願一卷控」(熊本大学附属図書館永青文庫寄託所蔵 No. 八——一四二) なお、肥後藩細川家と湯浅家のつながりに関しては、日吉町郷土資料館蔵湯浅家文書中に、「諸事控」(No. 三——一四)「湯浅家由緒書」(No. 三——一九)「家譜断 同附録 古事談」(No. 三——一〇)「累代粗手続書下案」(No. 三——一二)があり、湯浅五郎兵衛家から肥後藩への要求内容がうかがえる。
- (22) 水郡庸皓『天誅組河内勢の研究』(天誅組河内勢顕彰会、一九六六年)。
- (23) 波多野右馬介書状(藤本鉄石宛て、安政六年三月五日付) 京都大学附属図書館蔵。波多野右馬介は、松田の変名。同史料は、京都大学附属図書館に維新特別資料文庫に「檜林昌建等書状」(No. 尊/巻二八四/貴)として、同一の巻子に収められている。
- (24) 拙稿「薩摩藩島津家と近衛家の相互的「私」の関わり」『日本歴史』六五七、二〇〇三年)、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館、二〇〇四年)、町田明広『幕末文久期の国家政略と薩摩藩—島津久光と皇政回復—』(岩田書院、二〇一〇年)。
- (25) 『改訂肥後藩国史料』巻二、国書刊行会、一九七三年復刻、九〇五—九頁。
- (26) 「尊攘録上書類」(熊本大学附属図書館永青文庫寄託所蔵 No. 一三——二一六)。
- (27) 福田理兵衛については、京都市編『京都の歴史』七、学芸書林、一九七四年に詳しい。その他、南部彰造『新編福田理兵衛』(私家版、二〇〇五年)を参照。
- (28) 中村武生「古高俊太郎考—八・一八政変から池田屋事件に至る政局の一齣—」(明治維新史学会編『明治維新史研究』一、二〇〇四年)。
- (29) 池田屋事件については、宮地正人「歴史のなかの新選組」(岩波書店、二〇〇四年)、松浦玲「新選組」(岩波書店、二〇〇三年)、大石学「新選組—最後の武士—の実像—」(中央公論新社、二〇〇四年)、中村武生「池田屋事件の研究」(講談社現代新書、二〇一一年)を参照。
- (30) 西川太治郎『池田屋事変殉難烈士伝』(沢井元隆、一九〇四年)。

- (31) 革島家については、『重要文化財指定記念 革島家文書展』京都府立総合資料館、二〇〇三年を参照。
- (32) 船井郡教育会編『船井郡誌』（船井郡教育会、一九一五年）、井川市太郎編『丹波及丹波人』（丹波青年社、一九二一年）など。
- (33) 上野某書状（湯浅家文書No. 五―一―一五、前掲『湯浅五郎兵衛と幕末維新』二二頁掲載分参照）。
- (34) 加藤某書状（湯浅家文書No. 五―一―一七、前掲『湯浅五郎兵衛と幕末維新』二六頁掲載分参照）。
- (35) 維新後の湯浅五郎兵衛の事歴については、「郷土湯浅家由緒書写」（No.三―一―一三）、「古高俊太郎蕨岡所居屋敷買戻ニ付願控」、「湯浅征一郎事績概要」（以上、日吉町郷土資料館蔵）による。
- (36) 亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』本文編第三卷（京都府亀岡市、二〇〇四年）。
- (37) 「丹波国桑田船井両郡弓箭組同名簿（序）并二規約」（亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』資料編第三卷（京都府亀岡市、二〇〇〇年）五二―五六頁）。
- (38) 「上申書副申」（南丹市日吉町郷土資料館寄託、前掲『湯浅五郎兵衛と幕末維新』三八頁掲載分参照）。
- (39) 近代の贈位事業については、石川寛「近代贈位に関する基礎的研究」（『年報近現代史研究』七一―二一、二〇一五年、高田祐介「明治維新「志士」像の形成と歴史意識―明治二五・二六年靖国合祀・贈位・叙位遺漏者問題をめぐって―」（『佛教大学歴史学部論集』二、二〇一二年）を参照。
- (40) 津田信古書翰（湯浅達三宛て、一九二五年二月二日付）日吉町郷土資料館蔵。
- (41) 津田信古『奎堂松本先生二就テ』（宇都宮万五治、一九四〇年）。

